



新年のご挨拶

岐阜県日本中国友好協会
会長 杉山 幹夫

新年明けましておめでとうございます。
旧年中は会員の皆様にご協力いただき、日中両国の相互理解と友好親善の活動に格別のご尽力を賜り、心より御礼申し上げます。

昨年、当協会は新たな試みとして「ぎふ中国くるぶ公開例会」と題し、講演会や演奏会などを開催いたしました。日中関係が良好とは言えない状態が続く中、訪日客の増加の半面、訪中客が大幅減少する厳しい状況ですが、こうして定期的に話題を提供し民間交流の足跡を残せることを当協会の誇りと思っています。2017年度も理事・運営委員を中心に新たな企画を練っているところです。

昨年11月、中国・湖南省長沙で第15回日中友好交流会議が開かれ、当協会は土屋理事長を派遣しました。日中友好協会、中日友好協会など日中双方から多くの参加者が出席して意見を交換し、民間交流のさらなる促進を図るため今後もさまざまな活動を展開することによって一致した、との報告を受けています。

本年は日中国交正常化45周年、岐阜市・杭州市が「日中不戦」の碑文を交換してから55周年に当たります。1月14、15の両日、岐阜市のぎふメディアアコスモス会場で「ぎふ春節祭」を開催します。県内の華僑華人の方々とタッグを組んだ初めてのイベントで、節目の年の先駆けとなると信じています。また、恒例の「新春の集い」は2月4日、グランヴェール岐阜で開催します。所帯は小さくても「岐阜県日中友好協会、ここにあり」の気概を胸に、民間交流を一步でも前に進めるよう皆様の先頭に立ってまいります。

新しい年を迎えるにあたり、決意の一端を申し述べましたが、皆さまのご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

協会の自信と道しるべ

ぎふ中国くるぶ総括

県日中友好協会は公開例会「ぎふ中国くるぶ」を本年度活動計画の目玉と位置付けてスタートした。3回の講演会、二胡演奏会には会員以外にもたくさんの参加をいただき、当協会の自信と今後の道しるべとなったといえる。昨今の日中関係は政府間レベルの関係がいつこうに良くならないのは言うまでもないが、厳しい状況が続いている。日中の共同世論調査によると、双方の7〜9割の国民が相手国を良く思っていない。しかし、両国関係がこのままではいけない、と思う割合は双方とも7割を超えている。

当協会ではこれまでの事業の継続にあぐらをかかず、時代を先取りした、しかも身の丈に合った新しい事業を模索していかなければならない。そう考えた試みが「ぎふ中国くるぶ」である。

「楽しくあれ」―これが基本的な考えで、「聞く」「見る・食べる」「学ぶ・遊ぶ」などの語句から一文字ずつ拝借し「ぎふ中国」に「くるぶ」をくっつけてみた。

日中関係はどうあるべきか、と大上段に構えず、遊び心こそが固く閉ざした人の心の扉を開けると考えた。

例会のパート1は講演会。5月7日、岐阜市内の村上記念病院ホールでトヨタ産業技術記念館広報グループの阪本敦氏が「佐吉と西川秋次の物語」私が14年の中国駐在で感じたこと」と題し、トヨタの創業者・豊田佐吉と番頭の西川が戦前の中国上海で紡績事業を興し、日中の共存共栄を図ったことを紹介。その精神は上海市民にも語り継がれており、トヨタの礎の一角となっている。当日、秋次氏のご遺族も参加いただきとても感動した。

パート2は7月23日、同ホールで大垣共立銀行海外事業推進部長の後藤勝利氏に「私が出会った中国人、いつか真の友好を」と題して講演。合計13年、中国で過ごし、上海駐在員事務所を立ち上げ、事務所長を務めた後藤さんは「国や言葉の違いはあっても、人と人との

信頼関係が、ビジネスのみならず最も大事なこと。人々が互いを知る機会が増えれば、日中関係は好転する。中国にも親人家がいることを知ってほしい」と呼びかけた。パート3は9月20日、ぎふメディアアコスモスで二胡演奏会。上海在住の潘麗（パン・リー）さんが「糸」（中島みゆき）など、日中のヒット曲、名曲を演奏した。この日は台風が直撃、たたきつける雨と風の中、大勢の人の参加をいただいた。中止も考えたが、出席者の顔を見ながら、決行を決意した。

パート4は10月29日、朝日大学で中国史研究家の阿南・ヴァージニア・史代さんを招いた特別講演会。アメリカ生まれの阿南さんは平安時代の高僧「円仁」の研究を通して、日中交流に貢献している。

円仁は最後の遣唐使の随員として838年に唐に渡り、9年間の滞在中に「入唐求法巡礼行記」（円仁日記）を漢文で記した。阿南さんは25年かけて円仁の歩いた道（約7500キロメートル）を四輪駆動車で踏破。当時の人々が円仁に施した好意に感謝、円仁がたどった道に木を植える「円仁ロード」運動を続けている。

講演のテーマは「唐代の日中文化交流と慈覚大師円仁の旅」。円仁を研究するきっかけ、円仁のたどった道で出会った人々とのエピソードを紹介。「円仁ロード」運動は日中友好の一層の発展を願って始めた無償の行為であることを明かした。



円仁の足跡をたどり、出会った人々のエピソードを語る阿南さん＝瑞穂市穂積町の朝日大学

民間交流の活動アピール、西湖マラソン参加へ

長沙での日中友好交流会議

第15回日中友好交流会議が11月7、8の両日、中国湖南省長沙で開かれ、日中双方の約240人が民間交流の在り方について意見を交わした。岐阜県日中友好協会からは土屋康夫理事長が参加、分散会で当協会の取り組みをアピールした。以下、その報告。

同会議は30年前、宇都宮徳馬、廖承志両友好協会会長の発案で始まり、双方が隔年おきに会場を交代して開催。一昨年の大阪会議につづいて今回の長沙会議に参加させてもらった。当協会会員に感謝と会議の報告を。

湖南省は新中国建国の父・毛沢東の故郷（韶山市）として知られるが、劉少奇



第15回日中友好交流会議の開会式＝中国湖南省長沙の湖南華天大酒店



基調報告を聞く土屋康夫理事長

元国家主席の故郷（寧郷県）でもある。毛に次ぐ指導者だった劉は文化大革命で失脚、非業の死を遂げた。名誉回復

後、故郷の生家や記念館が建てられた。この辺りは本音と建前を上手に使いつける中国古来の知恵なのかもしれない。話を本題に戻す。会議は日本側から協会本部、都道府県の協会役員・会員ら約140人、中国側は中国人民対外友好協会、中日友好協会、湖南省など地方政府や友好協会の約100人が参加。「友好の伝統を引き継ぎ、民間の活力を呼び起こそう」をテーマに開幕した。

開会式で丹羽宇一郎日中友好協会会長が「民間交流の積み重ねは関係発展の礎になる」、唐家璇中日友好協会会長が「民間友好は中日関係ならではの強み、重要な支え」などと述べ、2017年の国交正常化45周年、18年の日中平和友好条約締結40周年は停滞した両国関係を改善させるまたとない機会。さまざまな交流で盛りあげることで一致した。宇

都宮徳一郎日中友好協会副会長と宋敬武中国人民対外友好協会副会長は基調報告で民間、青少年交流による国民感情の改善、後継者の育成を強調した。

分散会は「国民感情と相互信頼をいかに深めるか」「青少年交流の拡大、友好事業の後継者育成」「地方における経済、環境、介護分野での協力」をテーマに都道府県、地方代表が参加して開かれ、第3分散会に出席した。

発言時間は通訳を交え1人5分余り。短い時間でそれぞれ友好都市との交流、取り組みを紹介した。県日中友好協会は2017年が「日中不再戦」碑文交換から55周年、18年が碑建立から55周年にあたり、西湖マラソンへの参加など記念行事を計画していることを報告した。

どの参加者も政府レベルの関係が好転しない現状を冷静にとらえていた。あきらめたり、これまでの交流に甘んじたりせず、新しい形の交流を模索すべき時



民間交流の在り方について意見交換する第3分散会



唐家璇中日友好協会会長（元中国外相）と懇談する土屋康夫理事長

代に来てい
ると思った。
少しずつ
でもいい方
向変えてい
けばいい。
そう信じる
ことが私た
ちの希望に
なるはずだ。
最後にこん

な提案があったことを紹介する。

「人々の心を打つ、新しい時代の新しい交流を考えるべきだ」。

（文・写真とも土屋康夫理事長）

◆イベントのご案内◆

日中国交正常化45周年

岐阜市・杭州市「日中不再戦」碑文交換55周年記念

ぎふ春節祭

日時：1月14日（土）、15日（日）

10：00～17：00

会場：ぎふメディアコスモス（岐阜市）

※入場無料

日中友好新春の集い

日時：2月4日（土）10：30～

会場：グランヴェール岐山（岐阜市）

講師・演題：

愛知県立大講師 遠志保さん
不死薬はどこに？「徐福伝説を追いかけて」

下呂温泉山形屋女将 盛月芳さん
名湯が生む出会い

※会費6,000円